

〔資料〕

英国の Advanced Clinical Practice 教育における Work Based Research の実際と意義

加藤 由香里¹⁾ 大川 眞智子²⁾

The Practice and Significance of Work Based Research in Advanced Clinical Practice Education in the UK

Yukari Kato¹⁾ and Machiko Ohkawa²⁾

I. はじめに

岐阜県立看護大学では、看護実践を基盤とした教育・研究活動に取り組んでおり、看護実践の改善・改革と看護職の成長を同時に可能にする生涯学習支援のあり方を探求している。英国の Middlesex 大学では、看護実践を基盤とした学習方法として Work Based Learning（以下、WBL）を用いており、看護職である学生が職場の課題を解決するために実践を基盤にした研究活動、すなわち Work Based Research（以下、WBR）における Work Based Project（以下、WBP）に取り組んでいる。これまで、本学教員は教育能力開発の一環として、本学や現地における当該大学教員からの講義や交流等を通して、WBL 及び WBL における WBR/WBP の特性や方法とその実際などについて学びを深めてきた（北山ら，2019；大井ら，2019；布施ら，2020）。

筆者ら2名は、令和4年度国際交流事業として、英国の Middlesex 大学にて5日間の研修を行った。これまでの国際交流事業の研修における学びを踏まえて、Middlesex 大学における看護実践を基盤とした研究活動である WBR/WBP の意義と実際について、更に学びを深めることを目的とした。Middlesex 大学の教員からの WBR に関する講義に加えて、所属施設の課題を解決するために WBP に取り組んでいる Advanced Clinical Practice（以下、ACP：高度臨床実践）プログラム履修学生や ACP プログラム修了者である現職の看護職との交流を通して、英国の ACP 教育における WBR の実際と意義について理解を深め、本学の看護

実践を基盤とした教育・研究活動への示唆を得たので報告する。

II. 研修内容

1. 研修プログラム

研修プログラムについては、事前に Middlesex 大学の看護教員に研修目的および学びを深めたい内容について連絡し、現地での調整を依頼した。1日目は看護実践を基盤にした教育活動の現状に関する講義、ACP プログラムにおけるスーパービジョンに関する講義、スーパービジョンの実際である三者面談の見学（オンライン）であった。2日目は看護実践を基盤にした教育・研究活動に関する講義、ACP プログラム修了者との交流（オンライン）、ACP プログラム履修学生と教員の検討会の見学（オンライン）であった。3日目は Skills Simulation Lab 見学、ACP プログラム履修学生らとの交流（病院訪問、オンライン）、ACP プログラム履修学生の三者面談の見学（オンライン）であった。4日目は大学院における WBR/WBP の指導に関する講義、ACP プログラム履修学生・修了者との交流（Care Home 訪問、General Practice Surgery 訪問）であった。5日目は ACP プログラム修了者との交流（病院訪問）、ACP プログラム履修学生の三者面談の見学（オンライン）、博士後期課程の研究指導に関する講義等であった。

2. ACP についての理解

Middlesex 大学において、ACP プログラムを担当する教

1) 岐阜県立看護大学 地域基礎看護学領域 Community-based Fundamental Nursing, Gifu College of Nursing

2) 岐阜県立看護大学 看護研究センター Nursing Research and Collaboration Center, Gifu College of Nursing

員らから、ACP教育の概要及び実際、ACPプログラムにおいて行われているWBRについて説明を受けた。

1) ACPとは

ACPは、経験豊かで登録された実践者によって提供される。それは、高度な自律性と複雑な意思決定を特徴とする実践である。これは、臨床実践、リーダーシップとマネジメント、教育、研究の4つの柱を包括する修士レベル、またはそれに相当するもので、中核となる能力と分野特有の臨床能力を証明するものである。ACPは、個人、家族、ケア提供者とのパートナーシップのもとで臨床ケアを管理する能力を具現化するものである。様々な環境における複雑な問題の分析と統合を行い、人々の経験を高め、成果を向上させる革新的な解決策を可能にするものである(NHS, 2017)。

Advanced Clinical Practitioners (以下、ACPs: 高度臨床実践者)は、高いレベルの臨床技術と能力をもち、批判的・評価的思考、自律的かつ高度なレベルの複雑な意思決定と問題解決力がある。そして、自己、臨床、組織を変革することにより実践を革新する。また、マネジメントとリーダーシップの能力も発揮される。高度臨床実践者は、その特定領域における深い知識に加え、幅広い知識を持ち、従来の専門職の垣根を超えて活動する。ACPプログラムを修了することにより、高度臨床実践者という専門職の称号を使用することができる。

2) ACPプログラムの概要

ACPプログラムは、英国での一般診療やプライマリ・ケアにおける高度臨床実践のための中核的能力の枠組みである。人々のニーズの変化に対応した医療を提供するためには、新たな解決策が必要であり、そのためには、新しい働き方、新しい役割、新しい行動が必要とされた。ACPプログラムの修士号を取得するコースでは、ポートフォリオに示された職場での学習とWBRメソッドモジュール、リサーチプロジェクトモジュールに加え、WBPを履修することで、職場での実践研究の枠組みを作り、学びを応用することが最も重要となる。臨床での学習、能力開発など様々な学びに関するエビデンスを、学生がACPの能力に関連付けることができるよう促すために、臨床実践の場に臨床スーパーバイザーを持つことになっている。臨床スーパーバイザーは、学生が自身で選定する。学生とアカデミックアドバイザー(大学教員)及び臨床スーパーバイザーによる三者面談/プログラムレビューが学期ごと(年3回)に

行われ、学生の学習をサポートし指導する。

高度な臨床実践の能力があると評価されるためには、Health Education England (HEE (註1))が定める高度な臨床実践能力である臨床実践、リーダーシップとマネジメント、教育、研究の4つの柱をすべて満たしていることを示す必要がある。そのためポートフォリオを用いて、実践を計画し、深くリフレクションし、自身の強みを明確にして生かす機会を見出し、高度臨床実践者であることの意味を理解し、知識と技術を拡大させている。ポートフォリオにより、全ての能力に向けて努力したこと、最終的にそれを達成したこと、これからも達成し続けることが証明できる。

3) クリニカルスーパービジョン

ACPプログラムにおいてスーパービジョンは必須とされている。高度臨床実践者の称号を得るにはACPプログラムのポートフォリオに沿って全ての項目をカバーする必要があり、臨床スーパーバイザーは、その1つ1つの項目を進めるために、学生が現場でどのように取り組むと成長につながるかを学生に問いかけ、共に探索する役割をもつ。臨床スーパーバイザーは、学生とコミュニケーションが取れ、何を学んだかを学生とともにリフレクションすることで学生の学びにつなげ、ポジティブで学生を勇気づけられ、学生が求める分野の知識がある人とされている。

HEEで定められているスーパービジョンの基準では、トレーニング期間中、毎週最低1時間のスーパービジョンを行うこと、トレーニング開始4週間前までに学生とスーパービジョン計画について話し合うことが定められている。また、学生と臨床スーパーバイザー及びアカデミックアドバイザーによる三者面談の際に、アカデミックアドバイザーが臨床スーパーバイザーに対し役割の確認や相談にのる機会ともなっている。HEEでは、「スーパーバイザー準備チェックリスト」が作成されており、学生から臨床スーパーバイザーの役割を依頼された際に、質の高いスーパーバイズを行うための経験、知識、専門知識をもっていることを自身で確認するツールが提供されている。

4) ACPを導入する組織の体制

多くの雇用主が、役割を開発するための支援を希望しており、HEEが作成している「ACPへの準備チェックリスト」は、雇用主がACPへの準備を自己評価し、可能な次のステップを特定するものである。組織は、準備態勢の程度を1から4の尺度で評価する。1は準備の根拠がないことを意味し、

4はその要素が組織内に完全に組み込まれていることを意味する。チェックリストを用いた自己評価は、組織が組織の準備態勢を確立するために利用できるツールであり、組織がACPを支援するための資金に影響を与えるものではない。しかし、この結果はHEEがACPに関してロンドン全域の雇用主をより良く支援できるよう活用されるものである。

5) WBRに携わる教員の取り組み

(1) ACPプログラム履修学生への教員の関わり

アカデミックアドバイザーを担当している教員に、WBPに取り組む学生の状況や教員の関わりで大切にしていること等について説明を受けた。WBPは、職場に変化を伴う必要があるため、仕事にどう反映させるのか、プロジェクトを通じて明確な変化を及ぼせるのが大切になる。学生は職場に欠如していることについて熟知しているので、WBPは患者と地域にも変化を起こすことができる。

教員はチームでアカデミックなスーパービジョンを提供している。ACPでは職場でのサポートが重要であり、学生がクリニカルスーパーバイザーを決定するが、教員からは、学生に、影響を与える重要な関係者（ステークホルダー）は誰かを確認している。

ACPプログラムを履修している学生には、責任をもって主体的に学業を進めることを求めている。学生はシニアナース（註2）が多く、英国ではシニアナースは自律して権限もあるので、職場内での協力は得られやすい。職場側から取り組んでほしい内容を要求される場合もあり、学生自身が取り組みたいこととギャップがある場合もある。プロジェクトに対するサポートをクリニカルスーパーバイザーとなる職場の上司に求める学生もいれば、職場の中の医師に求める学生もいる。

教員は、課題の正当性と妥当性、プロジェクトの狙いが明らかとなるよう学生に関わる。学生は、実践者であり研究者でもあるので、学生の立ち位置やどんな役割を担っているか、この研究に適任であるのか、課題が職場に必要なかを、学生が明確に示すことができることを教員は大切にしている。職場の課題を明確にするために、問題として捉えていることを疑問として書かせたり、問いかけにより主観的に捉えたり広く捉えたりを促すなどを、対面やオンラインの面接で繰り返し行い、学生自身の声をより反映させるようにしている。また、学生の苦悩を理解してサポートすることを大切にしている。

(2) 教員が捉えたWBPを実践した学生への影響

看護分野に限らず全ての分野のWBRについてディレクターを担当している教員から、過去2年間に修了した学生5名に対し、半構造化インタビューにより、WBPの提言が実践にどう生かされているかなどについて聞き取り調査を行った結果について説明を受けた。

WBPを実践したことによる影響として、「プロジェクトに対するスキルを身に付けることができ、他のプロジェクトや役割に応用できた」「リーダーシップ、マネジメントスキルを身に付けることができ、自信がついた」「クリティカルに見る習慣や、自分で考えて判断する力が身についた」「周りからの評価、信頼が高まった」「昇進した」等の意見があった。また、プロジェクトを推進させる要因としては、「ステークホルダーを引き込むことによりプロジェクトが推進できた」「はじめからステークホルダーを関与させることが大切」「職場で充たされていない課題と学生のテーマが一致していた場合に効果があった」等の意見があった。

(3) プロフェッショナル・ドクトレイト（PD：専門職博士号）の学生へのWBRの指導

WBPのモジュールリーダーを担当し、PDの教育にも携わっている教員から、教員の関わりについて説明を受けた。PDコースに参加する学生との面接において、①研究課題の価値、②研究課題の影響力、③研究課題が職場のパートナーから協力が得られるか、④批判的なリフレクションができる準備があるかの4つの視点について教員は確認するようにしている。学生の頭の中では、まだ何をしたいのか明確ではないかもしれないが、学生の中にどれだけアイデアがあるのかを見極めることが大切である。また、テーマを導くためのデータがあるのか、学生がどれだけ課題意識を強く持ち追究していけるのか、教員は研究対象をアセスメントし、研究の価値を見極め、学生が持っている疑問が研究としての価値があるのかを学生とディスカッションすることで、研究課題を見極めることが大切である。

PDの研究の場合は、博士号の研究にふさわしい社会への影響があるか、誰のために、どのように研究の価値が影響を及ぼすのかをディスカッションする。従来の博士号（PhD）では、実践とは直接的には関係がないアカデミックな知識を追究するものであるのに対し、PDコースではフルタイムの職場があり、インサイダーリサーチャーとして専門の仕事と博士号を複合させて、専門職の観点から課題を精査

するものである。

PDの学生は、研究の実践現場に直接的に関わっていることが多いため、自分をその分野から引き離して考えにくいことがある。自身が職場で仕事をする中で浮かぶアイデアは個人的な意見であるが、研究では他者も認めるエビデンスが必要である。自身がバイアスのかかる存在であることを認識した上で、研究結果にエビデンスを活用して客観性を保つことが大切になる。フォーカスグループインタビューや質問紙を用いた場合も、率直な意見が出されているか判断して客観性を確保しなければならない。研究課題の妥当性の判断は、自身の職場がその課題を認めており、対立がないか、職場の人が研究に参加することに問題を抱いていないかを確認する。

PDの研究過程において、意義のあるリフレクションが行われているかは、従来のPhDには求められていないが、とても重要である。従来のPhDは真実のみを追求するのに対し、PDは経験的な学修をしているので、何を実践したか、実践がどういう意味をもたらしたか、人生に変化をもたらしたか、今の自分にどう影響を及ぼしたのかについて、批判的なリフレクションを求めている。学生は、影響について説明せず起きたことのみを話すことがあるため、教員はPDの研究の取り組みの中で学んだことや、次に何をするのかを言語化することを促すようにしている。研究の過程の中で学生のリフレクションの内容は変化していくので、自身のリフレクションがどう変化していったのかを学生自身にも比較してもらう。そうして修了する頃にはリフレクションができる人になり、リフレクションをしながら職場に変化を及ぼす研究者になることを目指している。

2. ACPプログラム履修学生及び修了者から捉えたWBPの実際

ACPプログラムを履修している学生3名及び修了者3名の職場を訪問又はオンラインにより、ACPプログラムにおけるWBPの概要や取り組み背景、取り組みの実際、プロジェクトが修了者や所属組織に及ぼした影響や成果などについてインタビューした。

1) 学生の体験

(1) Aさん（総合病院勤務）

難民に結核患者が多いことから、難民の子ども達を対象にビタミンD剤が投与されているが、すべての子ども達が服用しているかどうかは明らかではない現状があった。このこと

から、難民の子ども達すべてに必要なケアが行き渡るための公衆衛生上のサービス向上を目的としてプロジェクトに取り組んでいる。結核病棟に紹介状を出された難民の子ども達がビタミンD剤を摂取していたかについて、General Practitioner（以下、GP）や里親、ソーシャルワーカーを対象に調べていく。ビタミンD剤の投与により免疫力も高まるので結核治療にとっても良い。本プロジェクトのステークホルダーはGPや小児科医などであり、調査結果は確実にステークホルダーへ伝える予定である。

(2) Bさん（Nurse led clinic（註3）勤務）

ホームレスの人々は、早期に医療を受ける人が少なく、手遅れの状況で医療にかかる人が多く早期治療が必要である。現状では、ホームレスの人々へのナースレッドサービスのガイドラインはないが、ナースレッドのケースマネジメントによってどのように身体・精神の健康が向上するのか、その全体像を知りたいと思った。WBPの目的は、支援者とホームレスの人々が信頼関係を取り戻し、GP、介護職、他のサービスなどによるホームレス一人ひとりへの必要なケアを、コーディネートし医療サービスを向上させて、若いホームレスの死を未然に防ぐことである。本取り組みを通して、ナースレッドサービスにおける、患者にわかりやすいガイドラインが作成できる。多岐にわたる職種に加えて、当事者にも参加してもらい、患者が求めているもの、実際に実践したケースマネジメントをプロジェクトとしてまとめ、ガイドラインとしていく。ホームレスの人々との信頼関係形成では、無理強いせず、夜回りなどで声をかけ心を開いてもらえるよう願っている。また、既に心を開き頼ってくれている人々から他のホームレスの人々へ伝えてもらうなど、ホームレスの人々同士のつながりを大切にして関わり、ホームレスの人々の健康を取り戻すことを目指している。

(3) Cさん（高齢者ケアホーム勤務）

高齢者への支援は英国における重要な協議事項であるため、GP、訪問看護師、地区看護師、看護教育者、精神科看護師らが連携・協働しながら、地区内の高齢者（施設や自宅居住者）のフレイル対策や緩和ケア、終末期ケアなどに対して多機関・多職種チームで検討し対応している。プロジェクトのトピックを検討するために、何に取り組んでほしいか、所属施設の管理者を対象にインタビューを実施した。また、本施設のスタッフや地区の訪問看護師、地区看護師らと話し合った結果、褥瘡ケアに関する課題を確認し

た。所属施設にとって利便性の良いことは何か等も考慮して、褥瘡ケアに関する課題を解決するために介護職への教育的支援に取り組むことにした。

Cさんに加えて、介護職のリーダーとも交流したが、WBPの取り組みは介護職と施設にとってチャレンジングな課題であること、介護職と看護職の良好な関係性が重要であること等が語られ、共に働く専門職として本プロジェクトに期待している様子が伺われた。

2) 修了者の体験

(1) Dさん (Nurse led clinic 勤務)

WBPとして術前指導に関することに取り組んだ。COVID-19の影響で術前患者を対象にした対面式の教室を中止していたが、そもそも教室が必要なのか、効果的なのかをスコーピングレビューにて検討した結果、オンラインによるビデオ上映に変更した。スコーピングレビューを行うために適切な文献を探すことが難しかったため、アカデミックアドバイザーに相談した。プロジェクトの成果は同僚と医師にプレゼンテーションをして報告した。入院期間の短縮にはつながらなかったが、患者の痛みや不安が軽減され、すべてのプロセスを通して患者の満足度は高かった。

ACP取得後に、股関節人工関節置換など整形外科患者に対する退院後6週間のフォローアッププログラムを作成し、電話でのコンサルテーションを創設した。また、施設の質改善や監査、他プロジェクトのデータ収集、成果公表などにもかわかり活躍している。WBPの経験を通して、何を達成したいのか、どのような価値を高めるのかを常に考え続けることが重要であると考えようになった。

(2) Eさん (General Practice Surgery (註4) 勤務)

子宮頸がんは女性の死因疾患の高位であるが、地区内における子宮頸がん検診の受診率は国の目標値よりも低い現状があった。そこで、子宮頸がん検診に関するサービス評価を行ない、何が受診の障壁なのか、何が受診のモチベーションになるか、どうすれば改善されるかを明らかにするために、質問紙調査とグループインタビューを実施した。その結果を踏まえて早朝の検診を創設したところ受診率が向上した。更に、女性のヘルスプロモーションを支援する機会が欠如しているため、年代に応じて女性の健康を支えていくことが重要であることも明らかになった。

ACPプログラムを履修する以前はリーダーシップが不足していたが、WBPに取り組んだことで、女性の健康について

話すことへの自信やGPと交渉する能力が身につく、予約システムを再構築するなどの変化を起こせるようになった。自分の頭で自律的に考えることができるようになり、ものごとの考え方が身についた。GPやACPsとして勤務する看護師、多職種、患者などを含んだネットワークに参加して、現在の自身の活動について議論することができている。将来的には、スマートフォンでの検診予約システムの開発やメノポーズクリニックの開設をしたいと考えている。

(3) Fさん (総合病院勤務)

WBPとして、クリティカルケア・アウトリーチ・チーム(CCOT)を立ち上げて、入院中の急性患者を看護する病棟スタッフにCCOTメンバーが臨時的なサポートを提供する仕組みをつくった。これはナースレッドのサービスであり、病棟スタッフが入院患者の悪化の危険性があると思った場合や悪化した患者への対応について心配な場合、昼夜を問わずCCOTメンバーに連絡できるシステムである。これにより、病状が悪化して病棟に呼ばれるまでの時間が短縮できた。また、病棟とICUでの継続的ケアに取り組めるようになった。

WBPにおいて、病院からは行動を起こすこと、何をやって患者がどう変化したかを示すことが求められ、その関心は患者にあるのに対し、大学からは学術的側面やプロジェクトを遂行するプロセスを通して、よりよい看護師になることを求められ、その関心は学生に向けられていた。病院はキャリア開発として看護職が大学で学ぶことを推進しており、同僚にもACPにおけるWBPの経験者が多い。互いにより理解者であり、チーム全体がサポートで協力的であった。

WBPを終えて、自分自身が物事をシステムティックに考えるようになり、短絡的に問題解決をしなくなった。問題を深く考え、様々な人々を巻き込んでタイミングを計り解決していくようになった。また、持続可能な計画に変更することを望むようになり、その有益性がわかるようになった。WBPの経験が看護活動のモチベーションになった。

III. まとめ

1. WBRが看護職及び職場へもたらす意義

1) 看護職である学生への影響

WBR/WBPに取り組む看護職者への影響として、以下の5点が確認できた。第1に、現状を多角的かつクリティカルに見つめ、自身がどう取り組むかを考える力が身に付いて

いた。修了者へのインタビューより、「物事をシステムティックに考えるようになり、短絡的に問題解決をしなくなった（Fさん）」「自分の頭で自律的に考えることができるようになった（Eさん）」「何を達成したいのか、どのような価値を高めるのかを常に考え続けることが重要（Dさん）」など意見が聞かれた。また、教員による修了者への調査においても、「クリティカルに見る習慣や、自分で考えて判断する力が身についた」とされている。WBPはインサイダーリサーチャーとしての取り組みである。筆者らが教育・研究活動として行っている看護実践研究においても、内部の第一者が事象を客観的かつ主観的な見方で捉えるあるいは外的かつ内的な見方から捉える複眼的アプローチ（黒江ら，2014）であるとされており、インサイダーリサーチャーとして現状を多角的に捉えられる力が、その後の取り組みを考える力につながる重要な能力であるとする。

第2に、リーダーシップやマネジメント力が身に付き、自信につながっていた。修了者へのインタビューより、「話すことへの自信やGPと交渉する能力が身についた（Eさん）」「WBPの経験が看護活動のモチベーションになった（Fさん）」などの意見が聞かれ、また、教員による修了者への調査においても、「リーダーシップ、マネジメントスキルを身に付けることができ、自信がついた」とされている。ACPsに求められている自己、臨床、組織を変革することにより実践を革新する人材として、職場での課題に対してプロジェクトを推進していく上で、リーダーシップやマネジメント力は、「様々な人々を巻き込んでタイミングを計り解決していくようになった（Fさん）」と修了者が述べている通り、職場を革新する重要な能力となると考える。

第3に、実践を改善していく方法を身に付け、修了後も取り組みを継続・発展している。修了者へのインタビューより、「変化を起こせるようになった（Eさん）」「問題を深く考え、様々な人を巻き込んでタイミングを計り解決していくようになった（Fさん）」「持続可能な計画に変更することを望むようになり、その有益性がわかるようになった（Fさん）」など、実践を改善する方法を身に付けられており、更に、新たな取り組みを実践していたり、発展した新たな取り組みを考えたりしている発言（Dさん、Eさん）が聞かれている。また、教員による修了者への調査においても、「プロジェクトに対するスキルを身に付けることができ、他のプロジェクトや役割に応用できた」とされている。ACPプログラムを修了するこ

とにより、高度臨床実践者という称号を使用して活動することができる基盤が得られることや、取り組みの過程で職場や関係者からの理解が得られることが、修了後の取り組みの継続・発展にもつながっていると考えられる。ACPプログラムは実践を改善していくスキルを身に付けるものであるため、修了後からの取り組みが、真にプログラムの成果といえるだろう。

第4に、ネットワークを広げ、その中で更に自身の活動の発展を検討している。修了者へのインタビューより、「GPやACPsとして勤務する看護師、多職種、患者などを含んだネットワークに参加して、現在の自身の活動について議論することができている（Eさん）」などの意見が聞かれた。

第5に、修了者に対する評価が高まった。教員による修了者への調査では、「周りからの評価、信頼が高まった」「昇進した」などとされている。

2) 職場への影響

学生が取り組むプロジェクトが、職場で充たされていない課題と一致していた場合は、プロジェクトが現場で推進されやすくなる。それにより、現場の課題が改善に向けられ、人々への看護サービスの改善につながる。

職場で学生のクリニカルスーパーバイザーを務める人は、その職場で管理職を担っていることが多い。職場の管理職が学生のクリニカルスーパーバイザーとして、実践の革新に取り組む学生との週1回のリフレクションや、教員も含めた三者面談を定期的に行うことで、ACPについて理解を深め、WBPの考え方や学生が行おうとするプロジェクトについての理解を深め、WBRによって実践を改善する重要性を理解した推進者となる。また、スーパーバイザーの技術は遭遇する障壁や困難に注意しながら進めることであり、省察と人道的哲学を用いながら経験や発達を支えることである（Cunningham, 2017）とあるように、職場の管理職がリフレクションできる人材を育成するスーパーバイザーとして成長できることは、他のスタッフの経験や発達を支える管理職の人材育成にもつながり、職場全体がより質の高い実践を目指していくことにつながることを期待できる。

2. 本学の看護実践を基盤とした教育・研究活動への示唆

今回の研修では、実践を基盤にした教育・研究活動を展開しているMiddlesex大学において、WBLにおけるWBR/WBPの実際と意義について、大学教員や学生、修

了者との交流を通して学びを得た。本学では、看護職者が日常行う看護サービスの質の向上と現状の改革を導く実践性の高い研究活動に力点を置いた人材育成を主眼とし、看護学部看護学科および大学院看護学研究科を設置すると共に、看護の実務に就いている職業人の生涯学習支援の拠点としての役割を担うべく教育・研究・地域貢献活動を展開してきた（北山ら，2019）。これらの活動の基盤となっているのは、WBRと同様、実践の改善・改革をめざして取り組む実践を基盤にした研究活動、すなわち看護の実践研究である。

Middlesex 大学における WBR は、実践の改善・改革に取り組む研究活動であったが、そのためには当該研究が職場の実践上の課題を充たす取り組みであることや職場における臨床スーパーバイザーの存在が必要不可欠であることを本研修で再認識した。とくに ACP プログラムの学生は臨床スーパーバイザーおよびアカデミックアドバイザーの指導を受けながら、WBR の取り組みが実践にとってどのような意味があるのか、ACP に必要な能力の観点から自分自身と職場の実践をリフレクションし言語化すること、ポートフォリオに記録していくことが求められていた。これらのことを通して、学生は ACPs としての実践能力を身につけるとともに、批判的なリフレクションを可能にし、多角的に物事を捉えて創造的に課題を解決していく能力を獲得していくことが、大学教員や修了者の意見から確認できた。また、WBR においては、当該研究がどのような価値があるのか、職場・コミュニティ・社会にどのような影響をもたらすことができるのか、研究成果を確実に改善・改革へと結びつけるためにステークホルダーへいかに働きかけるか、といったことを研究計画の時点で検討されていた。また、研究論文の最後には、WBR の成果・影響の記述が求められており、実践がどのように改善・改革されたかのみならず、学生が自分自身を振り返り自己の成長について記述することも必要であった。これらのことは、看護の実務家がインサイダーリサーチャーの立場で、生涯学習の一環として取り組む実践研究において重要な要素であると思われた。

実践を確実に改善・改革していくことができる職業人を育成していくためには、職業人であるその学生の職場の理解・協力が不可欠である。ACP プログラムにおける WBR の取り組みにおいて、学生の実践と研究活動をサポートする職場の臨床スーパーバイザーの存在は大きい。大学教員

はアカデミックアドバイザーとして、学生とスーパーバイザーの両者をサポートしていた。このことを通して、大学教員は学生だけでなくスーパーバイザーの指導者としての能力も高めており、看護職主導で改革されていくための組織的な人材育成に大きく寄与していると思われた。Moore (2019) は、WBR の指導においては、ゲートキーピング（要所で確認すること）が必要不可欠だが、学生の自律性を尊重したかわり方が重要であり、教員の役割はプロジェクトのプロセスを監視することではないと指摘している。研究活動が順調に遂行されることだけが重要ではなく、学生にとって、学生の職場にとって、プロジェクトがどのような意味があるのかを共に考えることや、学生の実践経験を基盤とした研究活動となるよう職場の臨床スーパーバイザーと共に支援していくことが重要であると考えた。

修了者の意見において、同僚が WBR の経験者が多く、実践研究を通して実践の改善・改革に取り組むこと、生涯学習として学ぶことで自己の能力を高めることに理解があり、非常に協力的な研究風土が培われていた。これは、大学院での生涯学習に関する病院の組織的な理解・サポートも大きい。これまでの WBR に関する教育・研究活動および大学教員に対する信頼が厚いからこそであり、WBR が確実に組織の変革および個人への肯定的影響をもたらしてきたからであると考えた。

今回、看護実践を改善・改革していくために必要な能力を身につけることができる教育・研究活動として、WBL における WBR が有意義であることが確認できた。本学においては、看護実践の改善・改革をめざした看護実践研究を基軸に、教育・研究・地域貢献活動を効果的に展開していくためには、看護実践研究を通して実践現場の組織変革を引き起こすとともに看護職の成長を支援する体制づくりに向けて、大学と実践現場との協働をさらに強化する必要がある。本研修を通して得た学びを活かして、生涯学習としての看護実践研究の的確な支援・指導、その際の実践現場との協働のあり方・方法について、今後も検討していくことが重要であると考えた。

註 1 HEE 英国では National Health Service (NHS) という租税を主財源とする制度を通じて無料で医療サービスが提供されており、NHS による医療専門職の人材確保策として、保険医療教育イングランド (Health

Education England, HEE) が人材育成・確保の戦略策定にあたっている(白瀬, 2019)。

註2 シニアナース NHS では職員に対する人事・給与体系としてバンディングシステムがあり、看護職では、正規の看護師資格保有者はバンド5、熟練者や専門看護師などはバンド6、職場の責任者や高度臨床実践者などナースレッドクリニックを任せられるレベルの看護師はバンド7、組織全体の看護管理者はバンド8に位置づけられる。シニアナースはバンド6相当の看護師をさす。

註3 Nurse led clinic ナースプラクティショナーまたはクリニカルナーススペシャリストによって運営または管理されている看護師主導型の外来クリニックである。病院の外来部門、公衆衛生クリニック、独立した診療所内に設置されている。

註4 General Practice Surgery 家庭医であるGPや看護師などが勤務する一般診療所である。

謝辞

筆者らの研修に際し、Tina Moore 先生はじめ Middlesex 大学の諸先生方、同大学の学生及び修了者の皆様には多大なご尽力をいただき深く感謝申し上げます。

本報告における利益相反はない。

文献

Cunningham, S. (2017). Work-Based research in action: Nursing. 看護研究, 50(6), 547-554.

布施恵子, 尾関麻衣子. (2020). 英国の看護実践を基盤とした大学教育の実際から得た看護学教育のあり方への示唆. 岐阜県立看護大学紀要, 20(1), 129-136.

北山三津子, 石川かおり, 奥村美奈子ほか. (2019). WBL (Work Based Learning) & WBR (Work Based Research) に関する国際交流活動の経緯. 岐阜県立看護大学紀要, 20(特別号), 43-49.

黒江ゆり子, 北山三津子. (2014). 看護実践研究の可能性と意義 その1. 岐阜県立看護大学紀要, 14(1), 157-163.

Moore, T. (2019). Work Based Research: Supervision and Supervisory Practices. 岐阜県立看護大学紀要, 20(特別号), 67-74.

NHS. (2017). Multi-professional framework for advanced clinical practice in England. 2023-8-1. <https://www.hee.nhs.uk/sites/default/files/documents/multi-professionalframeworkforadvancedclinicalpracticeinengland.pdf>

大井靖子, 武田順子, 布施恵子. (2019). 英国の看護教育におけるWBLプログラムの実際. 岐阜県立看護大学紀要, 19(1), 163-170.

白瀬由美香. (2019). イギリスにおける医療専門職の業務変化—労働時間規制下での持続可能性確保—. 社会保障研究, 3(4), 521-535.

(受稿日 令和5年8月24日)

(採用日 令和5年11月15日)